

今年もお届けします…卒論・修論執筆応援号！



発行：京都大学 吉田南総合図書館 (愛称：逍遥館)
しょうようかん

〒606-8501

京都市左京区吉田二本松町

Tel : 075 (753) 6524, 6525

Fax : 075 (753) 6896

Email : eturan61@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

HP : <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/yoshidasouthlib/>

Blog : <http://yoshidasouthlib.hatenablog.jp/>

Twitter : @yoshidasouthlib

HP



Blog



L
i
b
r
a
r
y
N
e
w
s
l
e
t
t
e
r

夏季特別貸出はじめます

特別貸出期間中はいつもより長く本を借りることができます。論文執筆中の方には文献収集の絶好のチャンス！論文執筆はまだ先…という方も、論文のテーマを決めるためには、早いうちから様々な学問分野に触れ、知見をひろめておくことが肝心です。この機会を是非ご利用ください！

■実施期間

学部生：7月22日(金)～9月27日(火)
院生/教職員：7月22日(金)～9月10日(土)
*8月11日(祝)～21日(日)は夏季休館です。

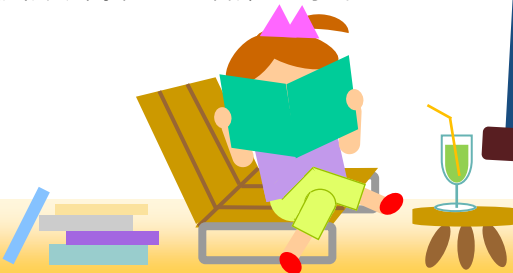
■返却期限日 2016年10月12日(水)

*夏季特別貸出の図書は更新できません。

■冊数(平常通り)

学部生：開架 5冊 書庫 10冊
院生：開架10冊 書庫 30冊
教職員：開架10冊 書庫 対象外

2016
7.22 Fri.
夏季特別貸出START!
Undergraduates 7/22-9/27
Graduate students & staff 7/22-9/10
(Library Closed 8/11-21)
DUE DATE: 2016.10.12
Impossible to extend this period
Available items in
Open stacks & Closed stacks



電子ジャーナル講習会を開催します

この論文、ネットで読めるの？

—15分で分かる電子ジャーナル基礎講座—

オープンアクセス等ネットで無料で公開されているものや、京都大学が契約しているものなど、電子ジャーナルに掲載されている文献の探し方から入手方法、適正利用のルールとマナーについて、電子ジャーナルに関する基本をたったの15分で伝授します。

日時：7月11日(月)–7月15日(金)

<各日>16:30–16:45

場所：吉田南総合図書館1F
調査・相談カウンター周辺

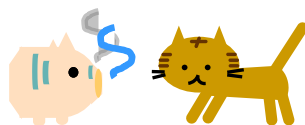
申込：事前予約優先(当日参加可も)
件名を「電子ジャーナル講習会」とし、
氏名・所属・回生・学籍番号・希望日を
明記して

eturan61@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

へメールしてください。



Follow me! "@yoshidasouthlib"



卒論・修論執筆応援キャンペーンを開催します！

文献集め、
手伝います。

京都大学吉田南総合図書館

2016

卒論・修論
執筆応援
キャンペーン

2016/07/01(Fri.)~08/05(Fri.)

[Weekdays] 9:00-17:00

Thesis writing support campaign

EXHIBITION

卒論・修論書き方本

論文の書き方に関する本を調査・相談カウンター前で
展示します。コーナーにある本は貸出もできます。

「先輩たちはこうしました。」

先輩たちがどのように論文を書いたのかを一問一答形式にして
まとめました。テーマは？苦労したところは？アドバイスは？
先輩からの生の声が満載のチラシを置いています。

先輩の論文

先輩たちがどんな論文を書いているのかが見えますか？
カウンター備付のリストで、同じ分野の人を探すことも
できます。(貸出はできません)

REFERENCE

先行研究の探し方・集め方 平日9:00~17:00

図書館の調査・相談カウンターはあなたの味方です。
文献の探し方・集め方、時間内ならいつでもカウンターにて
ご対応します。お気軽にご相談ください。

LECTURE

(仮)電子ジャーナル講習会

7/11(Mon.)~7/15(Fri.) 各日16:30~16:45

電子ジャーナルについての基礎知識を15分でご紹介します！

Welcome !

卒論・修論 執筆応援号

昨年度に修論を提出された先輩たちに執筆当時のエピソードを聞いてきました！

You can make it!

2016

T.Y. さん
人間・環境学研究所
博士課程1年生
テーマ「ジョン・デューイ
宗教論の共同性に
関する研究」

発表会で手痛い
批判を受けたので、
直前まで修正に
必死でした

■研究をしようと思ったきっかけは？

高校のとき、総人の岡真理先生^{(*)1}と佐伯啓思先生^{(*)2}の本を読んで面白いなと思ったので、総人に入學しました。元々興味の幅が広がったので、総人・人環の分野横断的な雰囲気自分にぴったりでした。

関心に従って、色々な先生方の講義・演習に出る傍ら、専門の文献を読むうちに、研究が楽しいと感じるようになりました。何かを徹底して突き詰めることが、性に合っていたのだと思います。アメリカの哲学者であるジョン・デューイの宗教論を研究テーマに選んだのは、宗教学に元々興味があった上に、アメリカ哲学のからりとした雰囲気自分が合ったからです。その中で、学部では十分に研究が深まらなかつたので、大学院に進学しようと思いました。先行研究が少ないので結構苦労していますが。

■修論のテーマ決めは大変でしたか？

割とすぐ、デューイの宗教論にテーマを絞ったのですが、そこからさらに問題の焦点を絞ることに苦戦しました。関心は決まったものの、そこから問いを立てるのがうまくいかなかったんです。適切なサイズの問いがあり、論文らしい問いの立て方があるので、

それがなかなか見つけれなかった。

適当な例を挙げながら、説明してみますね。例えば、論文を書くのに「宗教とは何か」という問いでは、恐らく一般的すぎます。もう少し掘り下げた詳細な問いを立てる必要があります。代わりに、「晩年の西谷啓治の宗教観は、前期・中期西谷の宗教観が抱えていた問題点を克服できたのか」と少し論文らしい問いになるのではないのでしょうか(この例は、今、適当に考えたので、論文として実際に成立するかはわかりません)。また、あまり関連しない複数の問いを織り交ぜるのも、避けるべきだと思います。恐らく、**問いの立て方は分野を問わず重要なこと**だと思います。

■修論を書いていて苦労した部分は何がありますか？

人によるでしょうが、ずっと修論に向き合っていると、自分の文章と距離がとれなくなることがあります。わかりやすく書けているのかどうか、自分の言いたいことが言いたい通りに書けているのか、読み直してもわからなくなってくるんです。客観視できない。

これを打破するためには、**他の人にコメントしてもらおう**が一番です。僕は、他の人に声に出して自分の文章を読んでもらいました。そうすると、構成のわかりにくさや論述が甘い箇所などが、ある程度わかってきます。協力してくれた仲間にはとても助けられました。

■修論提出直前の様子を教えてください。

修士2回生の12月初めに開催される分野合同の発表会で手痛い批判を受けたので、直前まで修正に必死でした。その時点で、修論提出である1月下旬まで1ヶ月を切っていたので本当に大変でした笑。

僕の研究室では、修士の2年間で3回程度、研究発表する機会があります。直前の研究発表で強く批判されたのは、研究が進むにつれ、構成の甘さや論旨の不明瞭さが明らかになっていき、不十分な所が目立つてくるからだと思います。研究発表は研究の方向性や文章について指摘をもらう貴重な機会でした。

■修論は、イメージしていたものに仕上がりましたか？

点数にしたら100点満点中、65点くらい。至らないところが多々あるので、読み返したくないくらいですが、頑張ったとは思っています。

デューイの宗教論については、ある程度整理できたので、博論では、修士からの研究の方向性は引き継ぎつつ、デューイの公共哲学にまで研究範囲を広げていきたいと思っています。

■修論を書き終わって今の感想は？

卒論も含めると約3年間同じテーマですとやってきたので、とても勉強になりました。院に上がるのと先輩と研究上の会話をしたり、コメントを貰ったりする機会も増えます。いただくコメントや質問に対して、自分うまく説明できないことがあります。その経験は有意義ですね。自分の文献読解や研究の方向性などに**か問題や弱点、誤解があるかもしれないと考え直すきっかけ**になるからです。そうした質問を予期して文献も読み込みましたし、とにかくいい勉強になりました。

■図書館でよく使ったサービスは？

学生購入希望資料制度^{(*)3}です。必要な研究資料を全て自分で買えるわけではないので、よく利用しました。

図書館自体はもともと頻繁に利用していました。授業やゼミで言及された本などを読むのにも利用していましたが、本格的に使うようになったタイミングは、3回生の時、指導教員とコミュニケーションを取り始めた頃です。よく行った図書館は、吉田南、附属、教育学部、文学部ですね。

■自身の研究において影響を与えた本は？

3冊あります。1冊目はフランスの人類学者マルセル・モースの『贈与論』^{(*)4}です。学部の1、2回生の頃に読んだ本ですが、この本の冒頭に「社会の一要素を研究するにあたり、常に全体との関係において考察しろ」という趣旨のことが書かれています^{(*)5}。これにとても感銘を受けました。

何かを研究するといつても、研究対象だけを見ていてもだめで、**社会全体でその対象がどういう役割を果たしているのか**、他のものとどう関係しているのかを常に意識してトータルで考えなくてはならない。この本の影響でそう考えるようになりました。人類学の本なので、馴染みの薄い文化について書かれたエッセイとしても楽しめる本です。

もう1冊は、富田先生の本で、『科学がわかる哲学入門』^{(*)6}です。富田先生の本は、連帯の魅力について教えてくれました。哲学入門としても最良の本です。

それから、『論文の教室…レポートから卒論まで』^{(*)7}もおすすです。論文執筆だけでなく、単なる読み物としても面白いですよ。

■これからの夢は？

とにかく、研究者になることです。哲学を専門にしながら、学際的な研究者になれたらいいなと思います。

■ありがとうございました。

同だったのか：『西歐近代』の帰結 佐伯啓思著 <1F教員図書 304|G|18|下> *3 学生購入希望資料(リクエスト)制度 京都大学吉田南総合図書館ウェブサイト > サービス > 学生購入希望資料の申込み
104|K|36> *7 『論文の教室：レポートから卒論まで』戸田山和久著 <1F選書 816.5|R|6> *8 『源氏物語：付現代語訳』【紫式部著】；玉上琢彌訳注 <1Fグレートブックス 913.3|G|6|6|1~10>

勉強をしつつ、新しい
人たちや先輩と話す
ことで、論文の型み
たいなものが自分の
中で見えてきました

■今の研究を始めようと思ったきっかけは？

大学時代に入っていた自主ゼミの影響が大きいと思います。もとは「国語の正しい読み方を教えられたら」と思い国語の先生になるつもりで、学部の際は東京学芸大学の教育学部で中学高校の国語コースにいました。その時に、源氏物語を読む勉強サークルのような自主ゼミに入っていました。そのゼミでは、毎週一人が担当の箇所を読み、文学的側面から論文のような形で自分の考えを書いて発表し、それに対して皆でディスカッションをします。このゼミで文学というものに触れて、**読みの可能性を探っていく醍醐味**を知りました。

高校時代をやってきた「国語の正しい読み方」だけでなく、人によって様々な解釈できる部分をいかに読むかということの重要性を知ったことで、高校時代と大学に入ってから、国語の見方ががらりと変わりました。ゼミで出る様々な解釈を目的当たりにし、どうして人それぞれの解釈がでてくるのか、読み方に正解がないなら、何を材料にして自分達は言葉だったり文学だったりを理解しているのだろうということを知りたくなりました。

■高校時代に考えていた「国語の先生になる」という目標が「言葉の研究をする」ことに変化していったんですね。

学部の時に、ある先輩から「正しい答えを出すのではなく、いかに納得できるように説明できるか、『解釈』をどう根拠づけていくのかというのが文学の一番大事なところ」と言われたことがありますが。そういう環境にいると、高校の時の「正しい読み」に偏重していた国語の授業に違和感が出てきます。「いろんな読み方」より「ちゃんと読めているか」が受験では必要だったのですね。

また、学部時代にしてきた塾のアルバイトで感じたのは、国語の授業を受ける中高の学生には「学校の先生の授業は面白い」という子と、「意味わかんない」という子の二通りがいるということでした。面白いという子は、いろんな読み方ができることを先生が教えてくれるから面白い、と言っています。意味がわからないという子は、正解が何なのかよくわからない。テストでどうやって点数が取れるかわからないし、と言っています。僕自身、中学校までは前者の考えだったんですが、受験の関係もあり、途中からだんだん後者の意見になってきました。「答えをどう書けばいいかわからないと成績が上がるんじゃないかな」と思うようになって、いろいろな解釈ができる面白さを忘れてしまっていました。けれど、大学に入ってまた

解釈の多様性という問題に興味が戻ってきました。それで、「なぜ多様な解釈ができるのか」という問に対する答えが出せないまま、将来、国語の先生になって学生に「国語の授業は面白くない」という思いをさせるくらいだったら、その問題の研究をしていう、という目標に変わりました。

というか、こういう解釈をする人はこういうところに着目していたからこう解釈ができた、というように先生が体系的に指摘できる環境を整えることができたらしいなど。そういうものに繋げていけることが研究をする意義になるんじゃないかと思っています。話がどんどん大きくなってますね(笑)。

■修論を書くにあたり、メンタル面はどのように変化していきましたか？またこのような過程を経て執筆されましたか？

修士論文提出直前期はわりとおだやかでしたね。修士2回生になったばかりのほうが結構きつかったです。自分の中ではそれなりに面白いと思っている内容でも、いざ研究室内で発表してみたら、自分が思っていたほどの反応が得られない。なんでなんだろうと違和感がありましたが、後になって**自分のやりたいことをうまく伝えられていなかったんだと気が付きました**。

特にこれといったテーマを持たずに、修士課程に上がって、とりあえずいろいろ勉強していました。自分の研究テーマについて漠然としているのは分かっていたんですが、いよいよ2回生になっても、テーマは漠然としたままでした。そもそも漠然としているという意識もなかったのかも。普通に勉強してると大丈夫でしょう、とも思っていました。だから研究テーマの発表の時も、自分のやりたいことを文章化し、資料にして発表してみると、具体的な事例もなく説得力もないので研究室の人達にもうまく自分の考えが伝わっていないようでした。自分としては、割と面白いことを言っているはずなのに、周囲の反応がいまいちで、もどかしく感じたのですが、今考えればある意味当然ですね。2回生の最初のうちは結構悩みました。

■自分のやりたい内容を伝えるためには、その前提についての説明をまずしなくてはならなくて、その内容について修論を書くことにしようと思ったのが2回生の10月でした。それまで考えていた構想ではうまくいかないから、どうしたら良いかと夏までずっと考えていたので、9月あたりは結構気分が滅入っていました。博士課程に行くのもやめようかと思ったり、すつともやもやしていました。それで、とりあえずもう一度先行研究をちゃんと見る勉強を始めました。すると、割とすんなり修論のプロットができあがってきました。もともと、実際はそれほど「すんなり」、ではない勉強もしないんですけど、ちよつと記憶があいまいで(笑)。とにかく勉強をしつつ、新しい人たちや先輩と話すことで、論文の型みたいなものが自分の中で見えてきました。こういうように書いたら説得力がでるかな、ということ、自分の何がけなくて理解されないのかがわかってきて、すつきりし始めました。先ほども言いましたが、本来自分のやりたいことは若干違っているけれど、やりたいことに進むために、修論で何を書かないといけないかが明確に

なったので、それこそ執筆の間はせつせと書くことができました。修論を書く人の中には、あれもやりたいこれもやりたいと思ってしまう人もいられるかもしれませんが、僕はむしろこれをやらなきゃいけないという感じで書けたので、良かったと思います。

■ストレスの解消方法は？

修士1回生の時は、博士課程の先輩に相談したりしていました。2回生の時はもう(自分のメンタル面の)傾向がわかっていたので「まかしながらやっています。落ち込んでいる時期は特に作業もしてはなかったんじゃないかな。夏休みは友達と会って話したり遊んだりして気分転換していました」。

■修論を書き終えられたあとの感想は？

心残りはありません。当初は、理論面と、実際のデータを見ていく面の両方から書きたいと思っていたのですが、先行研究で言われている仮説ではうまく説明できない事例がありました。それをどう直したら説明できるか、という論法で書いたので、理論的側面が強くなってしまい、実際のデータを見る作業が当初のイメージより少なくなっていました。これまでの理論を修正していく形、つまり先行研究で説明できない点を説明するための手立てを考える形をとったので、そのことで、本来やりたかった研究にまで手が回らなかった部分があり、博論ではこの課題に挑戦していきたいと思っています。

■自分の研究において影響を与えた本はありますか？

格好つけて言うなら『源氏物語』^(*)ですね(笑)。この中に出てくる和歌は、様々な解釈ができて、本当に素晴らしいと思います。学部の時のゼミでこの作品を取り上げ、直感で説明するのではなく、ロジカルに解説していくことを学び、解釈の可能性を感じましたし、解釈をする作業のお陰で、今の研究テーマにしようと思いつくかけになったと思います。自分の現在の研究においてな『Arenas of language use』^(**)です。

■最後に、「自身によって研究とは？」

今も「研究って何だろう」と迷うことはあるんですが、「人間の視野を広げてくれるもの」かなと思っています。

研究者は閉じた世界にいると思われれることが多いんじゃないかと思うのですが、思った以上に他の分野の人とも知り合うことができます。また、一般の人を始めとする専門外の人が、普通だった興味を持っていないことに興味を持たせることができるのも研究の力だと思っています。僕の場合、「人の言っていることがなぜ理解できるのか」なんてこと普通であれば気にも留めないことだけれど、それをいかに専門外の人にも興味を持ってもらえるかということに常に考えています。そういう意味で、研究は研究者自身だけでなく、その研究を聞いた人の視野を広げることも可能にするものだと思います。

■ありがとうございました。

<注> *1 『素椰子(なつめやし)の木陰で：第三世界フェミニズムと文学の力』岡真理著 <1F教員図書 904|N|2> *2 『人間は進歩してきたのか：「西欧近代」再考』佐伯啓思著 <1F教員図書 304|Q|18|上>、『20世紀とは？』 *4 『贈与論』マルセル・モース著；吉田禎吾、江川純一訳 <1Fグレートブックス 389|Z|3> *5 序論p.59、10行目辺りに拠る *6 『科学哲学者柏木達彦の多忙な夏：科学がわかる哲学入門』富田恭彦著 <1F教員図書 *9 『Arenas of language use』Herbert H. Clark <南棟3書庫 801.04|C|20>

開館日程表

YOSHIDA
SOUTH
LIBRARY

00 9:00-20:00

00 10:00-15:00

00 休館(日・祝日)

00 28日定例休館日

7月

- 1日(金)-8/5(金)
卒論・修論執筆応援キャンペーン
- 11日(月)-15日(金)
電子ジャーナル講習会
- 28日(木)
試験期間のため28日(定例休館日)も開館します。

8月

- 夏季休館 11日(祝)~21日(日)
「環on(わおん)」も休室します。



環on
Library わおん

「環on(わおん)」(人環棟1F)

開室: 平日9:00-17:00

本館の定例休館日も開室

休室: 土日祝日ほか

(本館の休館日と同じ)

7 22日~: 夏季特別貸出

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

8 8月11日-21日: 夏季休館

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

9 27日: 夏季特別貸出最終日
(教職員・院生は10日)

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	